

千世子（二）

宮本百合子

青空文庫

(一)

外はしとしと茅葺には音もなく小雨がして居る。

千世子は何だか重い考える事のありそうな氣持になつてうるんだ様な木の葉の色や花の輝きをわけもなく見て居た。ピシヨ！

ピシヨ！ と落ちる雨だれの音を五月蠅く思いながら久しく手紙を出さなかつた大森の親しい友達の処へ手紙を書き初めた。

珍らしく巻紙へ細い字で書き続けた。

蝶が大変少ない処だとか。

魚の不愉快な臭いがどこかしらただよつて居る。

とか云つてよこした返事を丁寧に馬鹿正直な位に書いた。

三日ほどしたらいらつしやいとも云つてやつた。

白い無地^{むじ}の封筒に入れたプクーンとしたのをすぐ前のポストに入れに自分で出かけた。

中へ落ちて行くのを聞き届けてから一寸の間門の前に立つて、けむった様な屋敷町を見通した。

近所に住んで居る或る只の金持の昔の中門の様な門が葉桜のすき間から見えたり、あけっぱなしの様子をした美術学校の学生や、なれた声で歌つて行く上野の人達のたまに通るのをジーツト見て居ると、少し位の不便はあつてもどうしても町中へ引越^{ひっこす}わけにはいかない、なんかと思つた。

はい 入りしなに郵便箱をあけると桃色の此頃よく流行る様な封筒と
なかみ 中実を一緒にした様なものが自分の処へ来て居た。

裏には京子とあんまり上手くない手で書いてある。

あっちこっち返して見ながら、こんなやすっぽい絵なんかのぬりたくつてあるものを平気で出してよこす其の人が自分の趣味とあんまり違つて居る様でいやだった。

たった今自分が手紙をやった人がこんな事を平気で居る人だと思ふとあんまり嬉しい気はしなかった。

部屋に歸つてあけて見ると、大森の見つともない町の不愉快さを涙をこぼすほど並べたててもう二日もしたらこつちへかえつて来ると云つてよこした。

行き違いになる——一寸千世子は思った。

まあ考えて御覧なさい。

目の下にはあの芥だらけの内海の渚がはてしなくつづいて、
会う女の大抵は見つともなくお白粉をぬった女かさかなつくさ魚 臭い女
で——。

「おむつ」がハタハタひらめくと魚の臭いがプーンと来る、もうほんとうにたまらない。

やっぱりあすこの方が好いからもう二日たったら帰ります。

そのほかに話相手のないつまらなさに、千世子に会いたい気持ちなんかを字につり合った口調で書いてあった、色の黒い背せいの高く
て髪きの綺麗ではつきりした口の利けない友達の様子をなんか思い

出したりした。

それでも来る日が心待ちに待たれた。

これぞと云った特長もないのに何故なぜこんなにもう七年ほどもつき合つて居るんだらうなどと云う事が妙に思われた。

一年も半年も会わないで手紙さえやりとりしなかつた時はたびたびでもその次会つた時には昨日会つた人達の様きのうに何にもこたわりもなく打ちとける事が出来たのも、お京さんが思いつきりの音無しい人で自分が我儘な気ままな女だからどうか斯うか保もつて居たんだ。

そうも思った。そしてお茶時にわざわざ、

ねえお母様、お京さんはやっぱり大森がいやだって、もう二

日したら帰るんだって云ってよこしたんです、雨が止まなくちやあ困る。

京浜電車と市街電車で長い間揺られなければならないのに降りこめられては何かにつけて困るだらうなんかと思った。

京子の来るまでの三日は何にも仕^する事が無い様な顔をしてやたらに待ちあぐんだ。

もう今日あたりはほんとうに来て呉れるんですよ、昨日^{きのう}だつて待ちばけなんですもの。

母親に独言の様に云つたりした。

その日の夜千世子は何となし後髪を引かれる様な気持になりながら或る芝居に行つて仕舞つた。

かなり前から見たいとは思って居たけれど行つて見ればやつぱりしんから満足出来るものではなかつた。

時々舞台からフーツとはなれた氣持になつて今時分あの人が来てやしまいかなんかと思つた。

それでも身綺麗にした若い人達の間を揉まれ揉まれしてゆるゆる歩いて居る時にはいかにも軽い一ひとつ色の氣持になつて居た。

クルクルに巻いた筋書を袂に入れてかなり更ふけてから「まぶた」のだるい様な氣持で帰るとすぐ京子は来たかと女中にきいた。

ええいらつしやつたんでございますよ八時頃に。

お留守だつて申上たら随分がっかりした様に御玄關にかなり立つて居らしたんでございますからほんとに御氣の毒でござ

いましたよ。

千世子は渋い渋い顔をした。

まあそうだったのかえ。

すまなかった。

と云ったつきりのろい手つきで着物を着換えたりした。

帯の「しわ」をのしながら女中は京子が旅へ出かけるらしい事を云って居たなども云った。

翌日朝早く京子の家へ「今日は一日居るから」と云ってやった。午後もう日暮方になって京子は重そうな銀杏返しに縞の着物を着て手が目立って大きく見える様な形かっこう 恰かつこうをして来た。

随分待つて居ただけけれど昨夜ゆうべだけはどうしたんだか出掛け

た処へ貴方が来たんだもの。

悪うござんしたねえ。

京子の千世子よりずっと大きい躰を見て云った。

「いいえ、何んとも思つてやしない。

でもお留守だつて云われたら変になつたの。

どうだつた事？ あすこ。

「私の事なんかより早くあつちで何をしてたんだか御話しなさいよ。

ほんとうにまあそんな見つともない処でどうして居るんだろ
うとよく思つて居たんです。

でもまる一月ですもの。

よく辛^{しん}棒^{ぼう}した。

「何をするしないもあるもんですか。

あんな処に貴方が私位居たらほんとにどんなだろう、話すの
さえいやだ。

それよりか私あさってつから西の方へ旅に出かけなけりやあ
ならないの。

「どうしてそんなに急に？

「何故だか知らないけどそうだったんだもの。

京子は伯父と一緒に一月ほどの予定である事や只遊ぶのが目的
だと云った。

先から思つて居る事だから嬉しいとか何か好い事が自分を待つ

て居る様な気がするとも云った。

「貴方は遊びに出かける方だから好い様なものの、私は一人ぼっちでお留守番だ！

あんまりいそいそして居るのが不愉快な様でなげやりな口調で千世子はそう云ってかたい笑方をした。

帰つて来てから相談する事があるとか考えてもらいたい事があるとか云つて、

「いくら私の前から望んで居た事でもこだわりのある気持で行くんだから、

嬉しさの半分はいやな相談から抜けられると云う事なんだもの。

いかにも思いあまつた事が有る様に云うとすぐ千世子は聞いて仕舞たかった。

「何なんです？」

何を考えてもらい事があるの。

「帰つて来てから好いんですの。」

そうさし迫つた事でもないしするんだから。

煮え切らない口調で話した。

「でもね、

私はほんとうに真面目に考えなければならぬ事なの、

その事を考えると先ぐ感情が先に立つ、それを鎮めて冷静にして居なければいけないんだから——

やっぱり私一人では困る――

不断あんまり物にこだわらない京子が今度ばかりこんなにして居るのを思つて大よそこんな事だろう位に京子の身に湧き上つた事件を想像した千世子は今その事について考えなければならぬいほどにまで話^{はなし}に深入するのをいやがった。

「そんならそれは貴方が帰つてからにして。

千世子は、こぼれそうな体^{からだ}の処々^{ところどころ}を細^{ふと}いのや太^{ふと}いやの紐でくくつて居る様な京子の体を時々ジロジロ見ながら、自分の今書こうとして居る筋を話して聞かせたり一寸した有りふれた話をした。

京都へ行つてからの事ばかりを云つて居る京子は、鴈次郎の

紙治が見られるとか、純粹な京言葉を習つて来るとか、いつもにないはでな口調で話した。

「京都に貴方の体はつり合わない。

むくむくしてかたい腕や、黒い手先をこすつたりした。

これからざあつと一月又会わなくなると云う事等は一寸も悲しい事にも淋しい事にも思えなかった。

新らしい書み物を二冊ほど持つて京子はせつついて歸った。

立つ日も聞こうとしなかったし御大事に行らつしやいなんかとも云おうとしなかった。

ましてステーションまでも送ろうなどとは夢にさえ思わなかった。

只旅に出る事ばかりをそわそわして嬉しがって居るのが千世子にはたまらなく氣にさわった。

けれ共翌日になるとこのまんま一日も会わないのはいかにも物足りなく思われて立つ時間を聞きにやった。

いよいよ立つ日には落ちては来なかったけれど泣きそうな空模様だった。

御昼飯を仕舞うとすぐ千世子は銘仙の着物に爪皮の掛った下駄を履いてせかせかした氣持で新橋へ行った。

西洋洗濯から来て初めての足袋が「ほこり」でいつとはなしに茶色つぽくなるのを氣にしながら石段を上るとすぐわきに、時間を仰向いて見て居る京子の姿を見つけた。

奇麗に結った日本髪かたの堅くふくれた鬘くしが白つとぼけた様な光線につめたく光つて束髪に差す様な櫛くしが鬘の上を越して見えて居た。だまつて先ぐ後から軽く肩を抱えた。

急に振りつ返った京子は顔いっぱいに喜んで、

「まあ来て下さったの、わざわざ。」

そう云つたつきり千世子の手を振つて涙含んだ眼で胸のあたりを見て居た。

そんなに時間もなかったので千世子は入場券を買つて居るとわきに居た京子は、

伯父ですの。

と云つて一人の男の人を引き合わせた。

うすい地のインバネスを被^はつて口元に絶えず堅い影をただよわ
せて居る人だつた。

その伯父と云う人は千世子に通^きり一ぺんの口を利くとそのま
ま赤帽の方へ行つた。

ただ見かけたただけだつたにしろ、ろくに笑いもしない様な伯父
と京都まで差し向いで居なければならぬのかと思うと斯うやつ
て満足して居る京子がみじめな様に思われた。

プラツトフォームに入つては口もろくに利けないほど急^せいた氣
持になつて持つて来たチョコレートの折^{おり}をわたりしわになつ
た衿をなおしてやつて居るともう発車の時になつて仕舞つた。

コトリと動き出して、京子の窓が三間ほど向うへ行つた時千世

子は何の未練みれんもない様にいつもの通りの歩きつきでサツサツと停車場を出て仕舞った。

急に開けた往来の真中に立つて見知らずの人達がただスタスタと目の前を歩いて行くのを見ると急に友達を送つて来たと云う一種異つた淋しい様な氣持が千世子の胸に満ちた。

電車の中では隣りの人の雑誌に心を引かれてすぐに家に行きついた。

入り口の石の上に見なれない下駄がそろえてあつた、来た人が誰だか千世子には一寸想像がつかなかった、母親の居間で客の話し声が聞えた。

男にしては細い上つ皮のかすれた様な声をその人は持つて居た。

千世子は自分の部屋に入ると懷のいろんなものを机の上にならべた時母親に呼ばれて千世子は居間に行つた。

あけつぱなしの縁側のわきに座ると母親は自分の近い身内の者で千世子にもかなり近い人だと云つた。

柔かな厚い髪が額にかかつて思いのこもつた眼と白い良くそろつた齒をその人は持つて居た。

肇と云う名だつた。

顔が細くて男にしては喉仏の小さいのや、少しずつひかえ目に内氣に物を話するのが千世子には快い氣持を起させた。

初対面のほぐれにくい話の緒をもてあます様にして居る肇の態度がまだそうはすれない人の様に見せてじきに一つ事に熱中する

らしく見せて居た。

又度々^{たびたび}いらつしやいな。

今度の時は御馳走してあげますよ。

などと母親に云われて肇が帰るとまだ肇の小さい時の事なんかを話してきかせた。

十二三になつても夜は一人で「はばかり」へ行かれなかつた児だつたとか、すぐ物を恐れる癖があつたとか云うのがその様子に思ひ合わせて千世子にはうなずかれる様な節々が多かつた。

「先はいいしとやかな児だつた。

それからもう十年より沢山会わないで居たんだからどう性質が變つたか分らない。

でも内気な氣持だけは今だに持つて居るらしい。

母親はこんな事を云つた。

「私は友達つてもものもあんまりありませんから、氣の向き次第いつでも上ります。

肇は自分の住居から一番近いと云う事と母親が女としては頭が有つたと云う事とで段々度々千世子の家へ来る様になつた。

来ても何をそう食べると云うでもなくしやべると云うでもなく他処よりも木の葉の深々と繁つて居るのを見たり、忘られた様な数多の書籍の裡から思いがけなく好い絵や言葉を見つけ出したりして居た。

上品なこの来る度の無口さは千世子に、やがて口を開いた時に

云う言葉の価値をいかにも大きいらしく思わせた。

貴方は一度緒くちを解といたらいつまでも話しつづける方なんですよ。ねえ。

そいでその緒をなかなかほごそうとなさらない。

たまに千世子はそんな事を云う事もあった。肇はにぎやかな、はでな処をわけもなく好いて居なかった。

遠くからながめる夏の暮方の森林の様な心の色が何にでもおだやかな影を作つて「我が」の勝かつた張はりづよ強い千世子の心さいその影のかすかな影響をうける事さえあった。

自分の好このみ、自分の思想、などと云うものはまだそうよく知り合わない千世子に明す事は一寸もないと云つて好い位だった。

自分が進んで話を切り出し、自分が自分を明かにする事よりも、人の云い出す話を静かに聞き、他人を細々と観るのが好きな人だとじきに知った千世子は始終自分のわきに眼が働いて居る様な気がして肇と相対して居るときには例え其の手際は良くなくつてもあんまり見すかされないだけの用心をした。

何と云う事なし、私は落ついた「まばたき」の少ない眼で見られるのは堪らなくいやなんです。

肇に対して自分の知識を深遠なものにし、自分の思想と云うものを尊いものにして置きたい千世子はあんまり不用心に知って居るだけの事は話さない。

お互に或る無形の鏡を持って照し合わせ様として居るのを又お

互に知って居た。

時々亢奮した目附で何か云い出そうとしてはフット口をつぐんで静かな無口になるのを千世子は興味ある気持でながめた。

肇のすきこのみなどを千世子は話すまで千世子は聞くまいと思つたし、千世子のすきこのみ、毎日仕て居る事、などは同様肇は何も知らなかつた。

^{ひたえ}額つき、眼つき、話しぶりで、大よその事は肇も知つたけれ共

思つて居る事の奥の深い処までその自分の想像をはたらかせない方が好いと思つて居たのだ。

人なんてものはあんまり知らない方が好いですねえ。

誰でも——お互に。

わたし

私は自分から進んで人を知りすぎて大抵の時はうんざりする。
千世子はこんな事を云う。

何だったかの折にジーツト一つ処を見つめながら、

尊い悲しみと、犯し難い沈黙は誰が持つて居ても尊げなもの
だ。

と云った肇の口調を千世子ははつきりとかかなりの時間が経るまで
覚えて居た。

多くの人は犯し難い沈黙を持つ事は喜びもし口にもする、けれ
共尊い悲しみと云う物を思う人達の数は少ないものだろう。

心の正しい、直^{すぐ}な人は喜びのみを多く感じると思うのは誤りで
ある。

笑いの影には悲しみが息づき歓樂の背後にすすり泣く悲しみがある。

悲しみなしの喜びは世の中に必してない。

いかなる詩聖の言葉のかげにも又いばかり偉大な音楽家の韻律のかげにもたとえ表面は舞い狂う——笑いさざめく華かさがある——
それでもその見えない影にひそむ尊い悲しみが人の心を動かすものである。

悲しみと云つても只涙をこぼすばかりの悲しみではない。

人は喜びの極点に達した時に或る一種の悲しみを感ずる、その口に云えない悲しみが美の極点にも崇高なもの、極点にもある悲しみである。

その口に云い表わされない悲しみの心に宿った時、口に表わせない尊いすべての事がなされるのである。

千世子は斯う思つて必ず有ると信じる「尊い悲しみ」を愛して居た。

自分の絶えず心に思つて居る事を思いがけない時に話されたので千世子はそれをかなりの間覚えて居たのだつた。

けれ共自分の心から湧きあがつた事でない限り一つ事をそういつまでも思いつづける事のない千世子なので久しい間とは云えじきに忘れて居た。

千世子は常々つねづね、頭の友達と、形の友達を持ちたいと思つて居た。

頭腦の機関からくりが手早く働いてねうちのあるものを産み出せる友達を持ちたがった。

けれ共その望は到底みたされ様にもなかった。

少し頭の細やかな、頭の先立って育った人達は或る時期にある特別に涙っぽい氣持を持って世の中のすべての事の一端をのぞいて全部だと思い込む人達であつた。

心の隅に起つた目に見えるか見えないの雨雲あまぐもを無理にもはてしなく押し拡ひろげて、降りそそぐ雨にその心をうたせる事を何の考えもないうちにして自らの呼び起した雨雲あまぐもの空が自然の空の全部と思ひなして居る人達だ。

そうして千世子は頭の友達に満足は出来なかつた。

自分は奇麗にせずとも美しいものを見、美しい裡なかに生きて居たい千世子が友達に花の様な人のあつて欲しいと思つたのはその突飛な事でもなかった。

千世子が自分から進んで交際をしたいと思うほど美しいには会えなかった。

たった一度千世子はフットした処でわけもなくただスナリと美しい人に会つた。

忘られない様な見開いた眼と長い「えり足」を持つて居る人だつたけれ共横から見る唇がたるんでしまりなく下さがつて居たので一目見ただけで千世子の心の喜びはあとかたもなく消えると、今まで美しいと思えた人が堪らないほどみつともなく思う様にな

った事があつた。

美しくもなく勝れた頭すぐを持つて居ると云うでもない京子と氣まずい思い一つしず^ずにこの久しい間の交際が保たれて居るたものは不思議だと云つても好い事だつた。

千世子とは正反對にただ音無しい京子の性質と何でもをうけ入れやすい加型性のたつぷりある頃からの仲善しだつたと云う事が千世子と京子の間のどうしても切れない「つなぎ」になつて居たばっかりであつたろう。

一言一言を頭にきいて話す頭の友達が出来そうなど云う事はその人が何であろうとも千世子には快かつた。力のある満ち満ちた生き甲斐のある生活を好すいて居る千世子にとって自分のまわ囲りをか

こむ人が一人でも殖^ふえると云う事が嬉しかったし又満足されない自分の友達と云うものに対しての氣持を幾分かは此^{このひと}人によつて満足されるだろうと云う深く知り合わない人に対しての良い予期も心の裡に満ちて居た。

(二)

夜が一番美しい。

昼間のまっすぐに通つた大路は淋しい人通りがあるばかりでいかにも昔栄えた都と云う事がしのばれます。

貴方にも都踊は見せてあげたい。

祇園の舞妓まいこはうっかり貴方に見せられないほど美しい可愛
いもんです。

自分で書いたらしい首人形のついた絵葉書に京子からこんな便たより
があつた。

貴方にうっかり見せられないほど――

その文句を見て千世子は一人笑いを長い事した。

自分の性質をよく知って居る京子がうっかり見せられないと云
うのはほんとうの事だろうと思つた。「美しい」と名のつくも
のは何んでも千世子はすぐ好きすになつたそしてもうはなしたくな
い様な氣持になつた、下らない子供のおもちやでもまた立派な道
具でも奇麗だとなるとすぐ自分の者にしたくなつて仕舞う。

だから、奇麗だと思つて居たものがきたなかつたりするとうしんからがつかりして仕舞うのが癖だつた。

家の者達は何でも物事を奇麗にばつかり思つて居る千世子はまるで世間知らずな小娘の様だなんと云う。そんな時には千世子はむきになつて「美しくさ」と云う事を説く^と。

「美しくさと云うものはどんな物にでもひそんで居る、その表面には出て居ないながらも尊い美しくさを速く^{さと}感じる事の出来ないのは一生の方^うちには半分位損をする。

自然の美しくさをあんまりわすれかけると大変な事になつて仕舞う。

人工の美しくさにはかなりな批評が出来るけれ共自然の美く

しきは批評をする事がなかなか出来ない。

すき間も無い美しくしさだから批評は入れられない。

人の手の届かない美しくしさを持って居るからだ。

なんかとはいつでも云った。

永い間つき合つて居る京子にこんな種類の話は幾度仕たかわからない。

京子はあるまり熱中して話す様になると、

美しくしさの氣違きちがいさん

と呼んだほどである。

そう呼ばれても千世子は満足して居る。



葉書をうけとつて間もなく千世子は返事を書いた。

そしてあんまり棒の太くない首人形をお土産に持つて来て呉れるのを忘れない様になどと戯談じょうだんらしく書きそえた。

女中にたのんで出させにやると入れ違いに肇が訪ねて来た。

いつも来るときまつて通す部屋に入れて千世子はいかにも喜んで居るらしい目つきでまとまりのつかない事をいろいろと話した。散歩に出た時の話だの旅行に行き度いと思うなどと一時間も立てばフイになって仕舞うほど実みのない下らない事を二人は話した。

「ねえ、

もう少しどうかした話はないんでしょうか？

「さあ、

もう少しどうかした話して。

上品な肇の沈黙がまたひろがって行く。

千世子は大きな籐椅子に倚よつて肘掛ひじかけに両肘をもたせて両手の間に丸あるい顔をはさんでじいつとして居た。

どっちかが口を切らなければ斯う云う沈黙はいつまでもはてしなくつづくのである。

何とはなし重つ苦しい垂たれまく幕の様な沈黙をやぶつて口を開くのは大抵の時は千世子であつた。

その時さつきから読みかけて居た形の小さな小奇麗な本をひざにのつけて居た千世子は、

お読みになりましたか。

と云つてその本の背の方を向けた。

千世子は肇の話の工合で自分の読んで居る物位は肇も読んで居るに違いないとあてをつけて居たのでそんな思い切った事をした。肇は小さくうなずいた、そして驚いた様な口調で、

沢山そんなものを読んでいらつしやるんですか？

ときいた。

「ええ

どうして」

「何故でもないんですが。

肇は又じいっと考え込む様な様子をした。

「貴方だつて私と同じ様に読んだり書いたりしていらつしやる。

そいだのに読んだものの話なんか何故一度もなすった事がないんでしょう。

遠慮していらっしゃったんですか。

「そう云うわけじゃありませんけど。

貴方なんかがそう読んでなんかいらっしゃるまいと思つて居たんです。

咲いた花の様な顔つきをして肇はそれから急にいろいろの事を話した。

千世子の知らない事も知つて居た。

一つ処を見つめて低い声で話されるのはいかにも快く千世子の耳に響いた。

尊い悲しみと云う事について死ぬと云う事について顔のほてるのを自分で千世子が感じたほど話したのはこれまでには例のない事だった。

物事に感じ易い涙もろい気持を持つて居る肇の一事一事が又感じ易い千世子の頭の裡に一つ一つとのこつて行つた。

「今日までは何を話して好いのか見^{けんとう}当がつかないで困つていたけれども」などと肇は云つたりした。

「死」と云う事に対して肇の持つて居る考えが誰でも若い者の持つて居るのと同じだと云う事や極く哲学じみた考えですべての事に対して居る事をその日になつて始めて千世子は知つた。

何かを抱えて居るらしい人だと云う感じがその時に限つてふだ

んの倍も倍も強く千世子の頭に湧き上った。

淋しい影の裡に喜びのこもつて居るらしい、黒の裡に紅の模様のある、おぼろ月の夜の影坊子かげぼうしの様な人だと千世子は先から思つて居たのだ。

近づき難くにくて近づき易いと云う事が肇の大変徳な性質になつて会う人毎に自分を高く保つ事が何の苦くもなく出来る事だつた。

自分が男だもんで着物の色彩からうける快こころよさ又一種の喜びなんかと云うものは到底味われない。

強いて目立つ色の着物でゾロツトする事などは学者肌とも云う様な肇の出来る事ではない。

色彩と云うものに対しての気持は一人前以上に強いのだ。

などと云うと千世子は短^{みじ}つかく「ザンギリ」にした頭をまるむきに出して青っぽい袴と黒か白位の着物をノコツと着た肇を見てつくづく気の毒な様な氣持がした。

この頃の若い女の人は随分飛び飛びな種々な色を身につける。髪に新ダイヤが輝いて赤い「ツマミ細工」のものなんかも一緒に居る。

それでも夏はそれほどひどくは氣にならないけれど冬羽織着物、下着、半衿とあんまり違^{ちが}う色を用^{つか}うのは千世子は好^すいて居なかつた。

紫紺の極く濃いのと茶っぽい色とを好^すいて居る千世子が夏の外出に、白い帯に赤味がかつた帯をすると氣がさす様で仕様がなか

った。

沢山の色が自由になると云う事が**いい**事で又悪い事だなどと云う事もあった。悲劇を産とも云った。

話の緒がフツトした事でほぐれるといかにも自由に肇はいろんな事を千世子にはなした。

予期して居た通りいつ来た時でも「あくび」が奥歯の隅でムズムズする様な事がなかった。

自分の生い立ち等を話す時はあんまり神経的になりすぎた。

けれ共一度寄せた大浪が引く様に高ぶった感情がしずまると渚にたわむれかかる小波さざなみの様に静かに美しく話す、その自分の言葉と心理こころをどうにでも向けかえる事の出来るのを千世子は羨みうらや

もし又恐ろしい事だとも思った。

千世子の好^すいて居る詩人をすき、絵風を好み、話をすく、肇は話^はがはずめば随分も長い間居た。

けれ共^{とも}灯^しのつくまでも千世子を相手にしやべる事はあんまりしなかつた。

人の物を食^たべる口つき手つきで千世子は人がきらいになる事がないでもない。

漸く話のわかつて来た友達を失うと云う事は嬉しい事ではないので結^け句^くその方が流^{なが}し元まで響き渡つてよかつたのである。



其の日は随分暑かつた。

明けられる「まど」は少し位無理をしたって開けっ放^{ばな}して客があつたらすつかり裡^{なか}が見える様にしたまんま書^{かきもの}物をして居た。ギツシリと書籍^{ほん}をつめて趣のある飾り方をして居る千世子の部屋を「誰かに見せてやりたい」などとも自分で思つて居る千世子は出来る事なら肇にこれを見せて驚かしてやりたいと思わないでもなかつたけれ共仕事に段々氣^{こころ}が乗るに随^{したが}つて肇に部屋を見せてやりたいなかと云う氣持が感情の裡から抜け出して仕舞つた。そしていつもの癖をむき出しに紙をなめる様にしてペンを運^{はこ}ばして居た。

そうして居るうちに肇が来て歸つて仕舞つたと云う事は思いもよらない事だつた。

肇は母親が呼ぼうとしたのに邪魔するのはお止めなさいって止めたなどとあとから聞いた。

でもまけおしみの強い千世子はそれについてあとでは一言も云わなかった。

肇に話そうと思つて居た事を夜母親に話してきかせた。

どう云う性格の人だと御思いになる？

などと千世子は母親に云つた。

けれ共これぞと云う人格をはつきり云う様な事はしなかったが心のなかでは「ハ―ア」と思つて居る位は千世子にだつてわかつて居た。

何にもそう追求する必用もないし又只友達でなみなみにつき合

つて居る分ならなどと千世子は思つて居た。

その晩千世子は両親の容貌の美醜によつて子供の性質に幾分かに変化を与えられると云う事が必ず有りそうで仕様がなないと話した。

「ほんとにきつとあるんだらうと思う。

あるらしい気がする。

そんな事を云つて眠りたがる母親を無理に起して置いてしやべりつづけた。

来る毎度に肇がぶちまけた話をする様になつたと云うのはたしかである。

けれ共千世子の読む物、書くものに対して一步もふみ込まない

事がいかにも快い事の一つであつた。

親切な保護者に両親はなるべきもので監督者にはなるもんじやあない。

保護者として自分が思うのはあながち両親ばかりと限つたわけでもない。

その人の云つた事なら千世子は心から満足して随う事が出来る。けれ共監督者には随つても心からではない。

そうは云うけれども眞の保護者と監督者がどんなに違うかを味わつてからでなくつては云える事じやあない。

千世子はよく他^{よそ}処の親の話が出たりすると母親に話したり肇になんかも一寸云つた事もあつた。

家内うちの者の事を話すのがすきな千世子は肇にさえ変に思われたほど熱して真面目に云った。

千世子は家の事を云う毎に必ず幸福だと云う。

希望に満ち、喜びがあふれて居る、と云う。すさんだ家庭ちいさに幼いから辛い目つらに会って来た肇はふっくりした、焼立やきたてのカステールみたいに香り高い甘味のある、たつぷりのうるおいがきめ毎にしみ込んで居る千世子の家の人達に交ると云う事はなぐさめともなり薬にもなった。

ホーム、スウィート・ホームと云う言葉をしみじみと味わって見られたらなどと肇が云うと、母親はすぐ、

貴方がお父様になればいい。

などと笑いながら云うと肇はフツト笑いかけても唇をつぼめて苦^{にが}い顔をした。

母親はそんな事を不思議がつて、

あの人は過去に暗い影を持って居るんじやあるまいか。

などと云ったけれども千世子には信じられない事だった。

物がすぐ好きになる、物事に限らず人でもすぐ信じ易い千世子は肇を普^{なみ}の友達としてこだわりのない気持で居たけれ共母親は深々と肇を観察して居るのが自分の為にだとは思いながら折々千世子に不愉快に思われる事もあった。

静かに育った頭と上品な話し振で、家庭の辛い裡^{なか}に育った人とは思われない様な調子であつた。

「彼の人の様子や頭でそんな事は無いらしい。

私はきつとない様な気がして居る。

千世子はそんな事を母親に云いながらも神経質で美しい口調としっかりした頭を持つて居ながら馬鹿な下^{くだ}らない事をして行方も分らない様になった知人の一人の事を思い出して思いがけない事のある人間の裡^{うち}に肇も入つて居るんだと思うと、もう一年もつき合つて居たら思いがけない処から、思いがけないものが現れて来やしまいかと云う様な事が思われた。

其の次肇の来た時、千世子はこの前の事を何にも云わなかった。肇も亦それについては一言も口に出さなかつた。

懷の裡に入れて来た肇の雑誌に千世子が読みたいと思うものが

出て居たのでそれを見つけるとすぐ奪う様にして息もつかず肇を忘れた様に読み始めた。

眼の奥が痛い様になるほどいそいで読んでフイと首をもちあげると不用意に千世子が昨夜^{ゆうべ}からのせっぱなしにして置いた短つかい一寸した感想の様なものを真面目に肇は見て居た。

千世子はホツと顔が熱い様になった。

けれ共すぐ元に戻った青白い顔を真正面に向けてうつ向いて読んで居る肇の顔を珍らしいものの様に見た。

丁度うつとりと眠つてでも居るかと思われるほど長い黒い「まつ毛」がジイツとして、うすい原稿紙^{かみ}を持って居る細やかな指もぴりっともしない。

こんなに静かで居て火花を散らして働いて居る頭の裡なかを想おもうと空そらおそろしい様な氣もした。

ややしばらくたつて肇がそれをテーブルの上に置いた時思いがけなく自分を見て居た千世子をチラツト見て子供がする様な笑い方をした。

誘われた様に千世子もだまつて微笑んだ。

千世子の頭には無斷で自分の書いたものむだんを読まれた事に対して何か云わなければならぬ様な氣持が満ち満ちて居た。

けれ共はにかみ屋の小娘の様に口に出しては何事も云わなかつた、そして母親と三人で一番近くにあつた芝居の話や新らしい書籍の話やらを開けつ放した氣持ちでして居た。

かなり名の聞えて居る小説家の裡で千世子はどんなにしてもただ訳もなく嫌いな人の噂や「何子氏」と自分の旦那様から呼ばれるその奥さんの事も散々頭ごなしにした。

文学に携^{たず}さわって居る女の人の裡には随分下らない只一種の好奇心や何となし好きだ位でやって居る人だつてある。

満足する様な人は一人だつて無い。

少し婦人雑誌で名が売れると一つ二つ著作してもう文士気取りでカフェーをほつつき廻る。

文士と云う名から氣に入らないしその裡にゴチャゴチャになつてホイホイして居る女の人達ももう一層嫌いだ。

千世子は亢奮した口調でこんな事を云つた。

話した後で黙って聞いて居る母親と肇の顔を見るとあんまり云い過ぎたと云う様な氣持になつて取つつけた様に笑つた。

そして、斯うやっていく分かはお調子に乗つて話し込んだ自分の頭のなかみをすっかり肇に見すかされた様ないやな氣がした。

それでも肇は千世子の云つた事に賛成した。

男の人達の裡にだつてそう云う人はいくらでもある。

よっかかりのあるうちは華に小鳥の様にさわぎ廻つて居た文学ずきの人達がその頼りを失つて世の中に投げ出された時、自分の持つて居た自信よりも値ねうちのない自分の頭がドシーン、ドシーン、とぶつかつて来る大浪を乗り切れないでその浪の中にのまれて姿の見えなくなる人が自分の友達の裡に数知れず有る、私もそうほ

かなれない人間かも知れない、でもやるだけはやって見る、若しそうになったらそれは私の運命なんだから。

眼先にちらつく物を追いはらう様な顔をしながら肇は低い声で云った。

幼い時頃から不幸な目にばかり会って来た自分はこれから何か仕様と云う希望はあつてもいつでも何とも知れずそれに手をつけると善くない事が起つて来そうに思われていけない。

物事をするのにあんまり考え深すぎる、いくじなしな人間の様に見える事がある。

自分の淋しい過去を思い出した様に涙組んだ様になった肇の大きな眼を見ると、兄弟がなくとつられて泣く赤坊か何かの様に千

世子も淋しいうるんだ気持ちになってこの先にだけは幸福にあらせたいなんかと思つたけれ共その影のうすい様に細い体や愁の絶えない様な声を聞くと肇の体が世の中から去るまで悲しい影がつきまとして居る様に見えた。

千世子はこれから草を刈つたり耕したりしなければならぬ畑地が苗を下すに合うか合わないか分らない様につくつくとのびて行くか、根ざしさえ仕ずに枯れて仕舞うんだか分りもしない事でありながら肇についてそんな事の思われたのはいかにもいやだった。

自分の一度でも口をきいた人達は皆幸福であつて欲しいと自分の身の幸福なお陰で千世子はいつまでもそう思つて居るのが天か

らぶちこわされて仕舞った様な気がした。

どうしても幸福であらせたい。

千世子は仲の善い きょうだい 同胞の様な又 なさけぶか 慈深い母親が子を思う
様にしみじみとそう思った。

肇が帰って仕舞ってからも母親に、

お前はどうしたの。

と云われるまで肇は何となし不幸らしい人だと云う様な事を幾度も幾度もくり返して話した。

早死にでも仕そうだ。

フット寝しなにそう思った千世子は若し彼の人の命の燃木が自分の手の届く処にあつたら先ぐ揉み消してしまいたく思われた。

（三）

もう十年ほど前に亡くなつた大伯父の一人っ子に男の子がある、十八で信二しんじつて云う。

大伯父が純宗教家でそう華々しい生活もして居なかつたけれ共旧家きゆうかだもんで今東京で相当に暮して居る。

千世子の家とはかなり親しいんで千世子なんかもちよくちよく行つた。

大伯母さんと千世子なんかは呼んで居た。三十八九の時、信二をもつたので息子の年の割に母親は老ふけて居て鬢ピンはもう随分白く額なんか「涙じわ」が寄つて居る。

まとまった意味のある話の出来ない人でクタクタな首をふらふらさせながら涙組んで、

父親が無いんで何かにつけて彼も可哀そうでねえ、

どんなに頼り^{たよ}がなかうと思うと。

なんかと泣く様に云われると、

ほんとうにねえ。

と云いながら千世子は座って居る腰をストンと落して大伯母と一緒にクタクタになりそうに気がめ入った。

大伯父はしつかり者で頭の明かな人だったから好い様だったけれど共^{おっと}その夫になくなられて後このクタクタな年中悪酒に酔わされて居る様な頭の大伯母が一人で自分の老後の掛り兎をなみなみに

仕上げ様とする努力は実に普通の母親が三人子供を仕立てる位のものだった。

「彼の人の云う事も思つて居る事も私には一寸も分らないんです。此頃なんかは困つて仕舞う事ばかりでねえ。

今の学校ももうじきに出るんですしこの先をどうしたらいいか、又貴方のお父様の御力でもかりなくつちやあねえ。

などとグドグドこぼして千世子にまで相談した。

「この間の休に毎日毎日四角なすじのある紙に何か書いて居ましたから『何をおしだい』つてきいたら小説とかを書いて居るつて云いましたつけが、暮しに困りさえしない様ならその小説屋さんにしても当人の好む事ならとも思つてねえ。

お金になりましたようかねえ。

千世子は何だか体中がムズムズする様だった。

金持になりたい人が小説屋さんになるのは間違つて居る□□□
偉いものになったから一人手にお金持になる事はあるかもしれない
けれ共金持になりたいのが目的ならだめだ。

千世子は大伯母がわかるまで廻りくどく七くどく話した。話を
きいた大伯母がげんなりした様に、

それなら、その小説屋さんとか云うものもいけず、ねえ。

と云つてグタグタといつもの様に首を振つた時何ともつかない面
白い様な可笑しい氣持がして笑が喉元にグイグイとこみあげて来
た。

そんなにこの大伯母に心配をかけるに十分なだけ信二もまたか
つちまりのない風にゆれる夕顔みたいなノコンとした気持で居た。
別に仕たい仕事もこの世の中には無い様に云つて居た。

生涯の目的が定まつて居ないからこれから先行く学校は自分で
も分らず親類の者の考えで蔵前を受けて誰でもが予想して居た通
りの結果で選抜されるほどの頭も鬼つ子で持つて居なかつた。

或る学校の補欠の試験を受けるつもりで当人は居るけれ共身内
のものは皆あやぶんで居る。

もうまるで大人になつた体をもてあました様に柱によつかから
せてついこないだから着始めた袖の着物の両袂に手を突込んで突
袖をして居る様子は「にわか」の由良^{ゆら}さんを十倍したほど下品に

滑稽で間抜けに見えた。

千世子が齒がゆい様に眉をまゆピクピクさせながら、

貴方、何か好きな事はないの、そうやってたって仕様が
ないじゃありませんか。

大伯母さんはそりやあ案じてなさるのに。

なんかと云うと、

ええ

と青っぽい油の浮いた顔を赤くして寝ぼけた様な返事をするのが
千世子には堪らなく見つともなかった。

まとまりのない頭の裡を大部分占めて居る其の年頃特有な気持
が何かにつけて見つともない様子を信二に与えた。

何となしノポーツとした躰やじいつとした瞳や、やたらに気味悪いほど赤い唇が信二の年と共に育つて、その唇からジラジラした嫌な声が出ると千世子は自分の体がちぢまる様な気がして自分がこんな男でなくってよかつたなあと思う心とやれやれと思うのが一緒に混^{まじつ}た溜^{ため}息をついた。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

初出：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2008年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.w.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千世子（二）

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>